



幻想郷爆!!!

For Adult Only

ま え が き

天地がいやくプラス

こんにちは！ いです
札幌でもちと いです
青森帰って楽しいわーい
佐々木も一緒に帰ってわーい
よし、これでわーいーわいーわい

しかし、まだまだこの人生
霊夢ー霊夢ーあおあおー
まふもふもふまふ
生きてわんさか

5 BOSS

N E X T

れいせん・うどんげいん・いなば

「失礼致します」

入室を許可された少女が凜とした声を響かせ、分厚く硬質な扉を押し開ける。

一対の獣耳を備えた、愛らしく幼い風貌の少女は一見すると先ほどの声のイメージにはそぐわない人物像であるが、その威風堂々とした態度と明確な意思の宿った赤い瞳が声の主に相応と言った印象を与えている。

「ふむ、幼子と言っても一端の戦士に育ちつつあるな…荣誉ある月都の民、誇り高き月兎の一族としてこれからも更なる研鑽に励んでもらう事になるが、今日の事はもう聞いているのか？」

「はい、本日も訓練の一環と伺っております、具体的な説明は特に受けていませんが…」

「よかろう、では本題に入ろうか」

木製の執務机越しに男が話を切り出すと、月兎の少女は改めて背筋を伸ばし、拝聴の姿勢を見せる。

「お前の持つ狂気を操る特質、非常に稀な才能ではあるが前例が無い訳でもなくてな、それなりの訓練方法も確立されているのだよ」

「では本日の訓練とは」

「察しが良くてなによりだ、今回の件は君が思っている通りその特質を更に引き出す為の特殊な訓練となる、カリキュラムも組みあがっているが、1日や2日で終わる内容ではなくてな」

持って生まれた能力の宿命に本人の意思が介在出来る訳も無く、物心付く前より訓練を受け技術を磨き、知識を蓄えさせられてきた。

今後の人生がどう変わるにしろ、現時点での鈴仙は戦場と言う巨大な機関を駆動させるパーツの一つに過ぎなかつ

た。

「了解です、さっそく準備に移りたいのですが、どの様な訓練内容となるのでしょうか？」

「それが異能の力による物だとしてもだ、精神に働きかける類の能力を行使する以上は繰り手側にも相応の心の強さを身に付けてもらう必要がある」

男の言葉を一つ一つ確かめる様に鈴仙は頷く。

「そこでだ、君には取り込まれない程度に…ではあるが狂気について一つ勉強してもらおうと思っただけ」

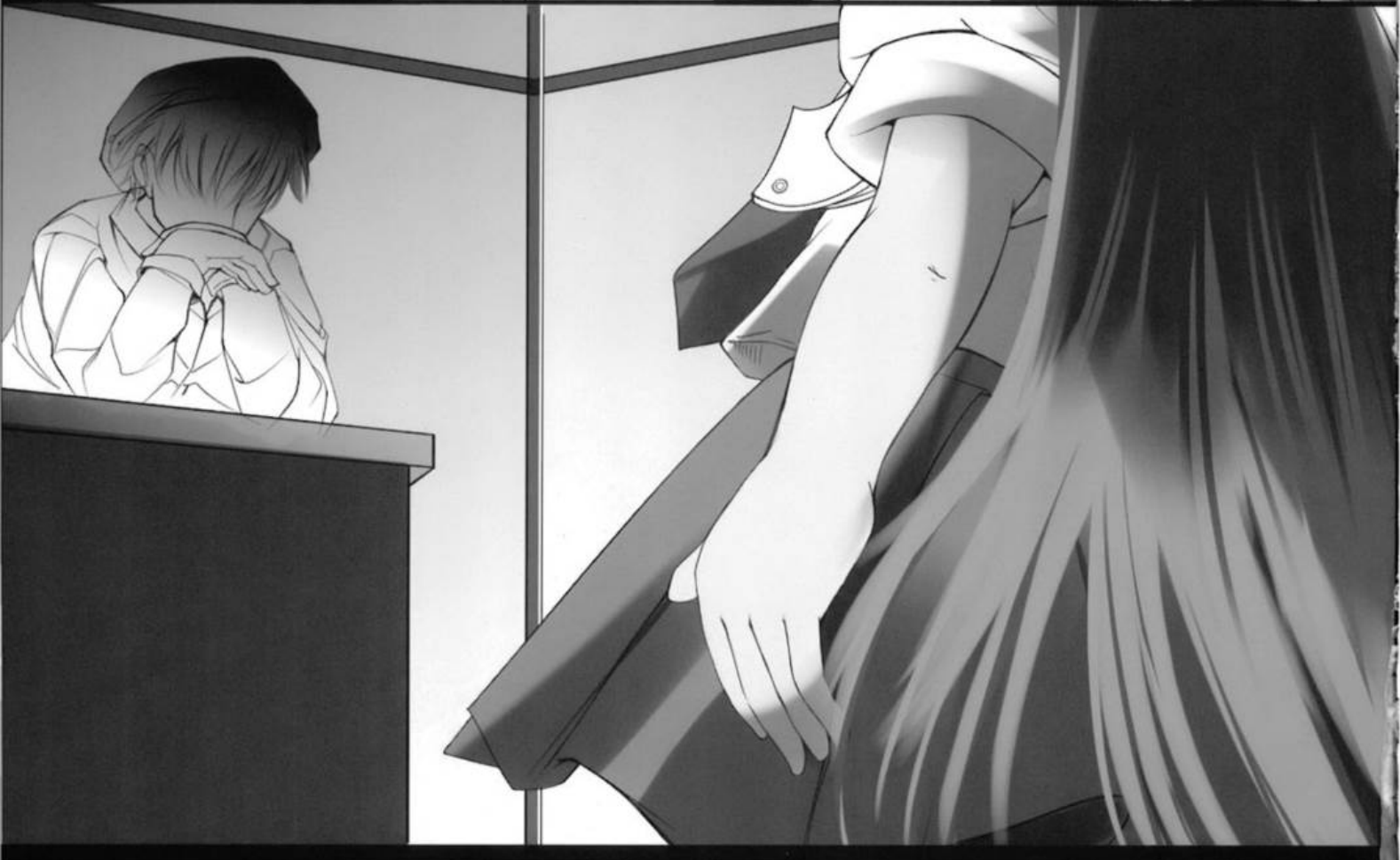
「はあ…勉強ですか」

今までの口ぶりから、どれ程の特殊で苛烈な訓練を申し付けられるのだろう、と身構えていた鈴仙にとって、若干拍子抜けすらする単語であった。

「なあに、そう難しい事を要求するつもりはない、ただ黙って言う事を聞いていけばいいだけの話だ」

もっともらしい口調ではあるものの男の具体性を欠いた説明は鈴仙に若干の不信感を持たせる。

皮肉にもその予感はずいぶん正しい物であったが、それを知る術が無い以上、これから訪れる危機を回避する事もまた不可能であった。



「ではこちらに來たまえ、早速始めるとしよう」

手招きに応じた鈴仙が皮張りの豪華なイスに近寄ると男はおもむろに両手を伸ばし、細い肩を強引に引き寄せる。

突然過ぎる行動に成すがままとなる鈴仙を前に、男はごく自然な動作でほのかな桜色を覗かせる彼女の唇にむしゃぶりついた。

「んっ！んっ、んんっ！んんっ！」

鈴仙は状況の把握と然るべき手段の考案、その実施といったロジックを組み上げ様とするも、男のヌラヌラとした舌が蠢く耐え難い嫌悪感から、思考が霧散していく。

「んっ、んむっ……んっ……んっ……！」

結果として、うめき声をあげながら体をよじる程度の抵抗しか許されない鈴仙をよそに、男は自らの力の前に屈服する女の口内を存分に堪能する。

途中、チクリとした痛みが首筋に走るが、次の瞬間には男との濃厚なキスに引き戻され微かな違和感は意識の外へと追いやられた。

唇同士が隙間無く密着している以上、お互いの交じり合った唾液は喉の奥へ流すしか処理方法が無く、鈴仙は目に涙を浮かべながらそれを嚥下するのだった。

5分ほどそうしていただろうか、突然男の拘束から開放された鈴仙は咳き込みながら床に膝を突く。

「どうしてこんな、私、私……」

「どうしたもこうしたも、事前に訓練概要は説明しているぞ？」

事前に説明している……言葉の裏に隠された意味に気が付く頃には床に伏せている鈴仙に男が覆いかぶさっていた。

「やだ、やめて！触らないで……！」

男は鈴仙の抵抗をまるで意に介さずに後ろから抱え上げ、手馴れた手つきで体をまさぐっていく。

品定めをするが如く下着の上から尻を撫でさすり、ブラウスの上に添えられた手も一通り双房の形を確かめると指の腹で軽く乳首を刺激する。

「うっ、ああっ……駄目っ！そんなところ、やだ！」

決して乱暴に扱わず、あくまで繊細な動きを続ける……性感など意識をした事も無い幼子にとってはその優しさがかえって得体の知れない恐ろしさとなっていた。

「これは期待できるな……」

男の声には耳もくれず、歯をくいしばりながら全身を蝕む異様な熱気と理解の範疇外にある未知の感覚を耐え忍ぶ……首筋が妙に熱くトクン、トクンと波打つ感覚もまた、鈴仙に言い知れぬ恐怖を与えていた。

どれだけ執拗に体を弄られていたのか、時間の感覚が曖昧になってくる中、気が付けば男の手は下着の中に入り込んでいた。

男の愛撫に晒された結果、下着の中は熱く湿った空気に満たされしており、まだ毛も生えていないそこもビショビショに濡れそぼっていた。

このまま流されては大変な事になる。本能でそれを悟った鈴仙は気だるく全身を弛緩させる霧を振り払う為、残りわずかな理性を手放してしまわないように体をギュッとこわばらせる。

すると男は待っていましたとばかりにタイミングを合わせ、それまで放置していた陰核に狙いを定めると、包皮の上からトントントントンとリズムカルに小突いた。

「ひっ！うっ！ああっ……ああっ！ひゃああああっ……！」

それまでの真綿で締められる様な緩やかな感覚とは異なった、その直接的過ぎる刺激を前に今まで積み上げられていた官能の堤防があっさりとは決壊する。

×の刺激を受けた部位から放射状に広がった波は、女として未成熟もい所である鈴仙を容赦なく包み込んでいく。

目の前がチカチカと点滅し、全身を震わせながらも顔の筋肉は無意識下の中で微笑みを形作る。

それは紛れも無く、官能の喜びに打ち震える淫蕩な笑みだった。



「随分と良い顔をするようになってきたな、そんなにクリトリスがお気に入りなのか？」

「んっ、はあっ、はっ、はっ…」

生まれた初めての絶頂に押し上げられた鈴仙は男の悪態に反応する余裕も無く、肩で息をつく。

「ほら、いつまで休んでるつもりだ…これでは訓練にならないだろうが」

床にへたりこんでいる鈴仙に覆いかぶさると、男は再び強引なくちづけを見舞う。

「んっ、ふぶっ、んっ…むぐっ、んっ、くちゅ、んっ…」

男の舌は前回の時よりも一層荒々しく動き回り、身を委ねるしかない鈴仙の頭にはどこか、己が大型の獣に捕食されているイメージが浮かんでいた。

男の口が離れると鈴仙の真っ白なブラウスが肌着ごと捲りあげられる。

すると、ささやかなふくらみ具合に到底似つかわしく無い程、淫靡に先端を尖らせ、自身をアピールする乳房が露出された。

「ほほう、こども完全に勃起させて…まったくいやらしい奴だな」

「ああっ、やっ…ああっ…」

未だ絶頂後のふわふわとした感覚が抜け切らず、前後不覚となっている鈴仙はその光景を他人事のように見つめていた。

「では仕上げと行くか」

夢うつつといった様相の鈴仙を前に今度はスカートの裾に手をかけ引き摺り下ろし、鈴仙の下着が露にされる。

鈴仙自身の汗や他の分泌液により湿り気を帯びたそれはピッタリと素肌に張り付き、尻や女性器の輪郭がクツキリと浮かび上がっている。

スカート内に箆っていた空気が入れ替わり、下半身を空気が撫で上げるヒヤリとした空気が鈴仙の意識を少しばかり引き戻した。

「これ以上、こんな事、やめてください…こんな訓練とは呼べません！」

「ふん、それを決めるのは我々の領分だ、この獣風情が…」

訴えも虚しく、男は鈴仙の下着を脱がしにかかった。

鈴仙も足を閉じ抵抗するも成人男性の膂力に勝てるはずもなく、やがてこじ開けられたそこが、昨日までは単なる排泄器官でしかなかったそこがオスの眼前に差し込まれた。

その現実から先ほどまで味わっていた快楽により、思考の隅へ追いやられていた羞恥心を再び顔を見せ始める。

男は目に見えて紅潮し始める鈴仙の顔をつぶさに観察すると股座に顔を押し込め、柔肉を愛撫する。

「ひゃあっ…あっ、そんな…なめるなんて、あっ、んんっ、やあ、やだあ！」

元より自らの体液で濡れそぼっていたそこは、舌が動かされる度にピチャピチャと淫猥な音を響かせ、無慈悲に鈴仙の耳朵を打ち続ける。

羞恥心と快楽が混ざり溶け合い、鈴仙の身心を侵すに連れて、緩やかな弛緩は進行を続け、悲鳴はくぐもった喘ぎ声へと変わっていった。

男の舌が不意に包皮をつるりと剥くと、鈴仙は声にならない声を響かせながら体をビクビクと跳ね上げる。

いつしか、両の腿は男の頭を逃がすまいと言わんばかりに男の頭をガツキリと締め付け、自然に持ち上がった腰はカクカクと震え自らの秘部への刺激をより強い物としている。

惚けた表情で悦楽を享受する鈴仙にもはや抵抗の意思は無くその身に収めるにはあまりに大きすぎる性感に骨の髄まで支配されていた。



どれ程の時間が経過しただろうか。

全身への愛撫は止む事は無く、鈴仙の体で男の指や舌が触れていない部分を探すのは逆に困難な程だった。

数え切れない回数達した鈴仙ではあるが、気をやればやる程に何か足りないといった切ない気持ち広がっていく。

心にポツカリと空いた空洞が自身を埋めてくれと懇願してくる。

今もシックスナインの体勢で男のクンニを受けている鈴仙は、やや焦点の定まらない瞳で目の前に突き出されたズボンの膨らみを見つめていた。

「そんなに俺のチンポが気になるのか？」

唐突な男の指摘に鈴仙はビクリと硬直すると、同時に下腹部の奥がきゅううと収縮する。

「い、いえ…そんな事は」

「遠慮してくてもいい、どうせここには私と君しか居ないんだ、男のモノなんて見た事ないんだろう？私には別に構わんのだが」

立ち上がった男に釣られて跪く姿勢になった鈴仙は眼前の膨らみから目が離せなかった。

（そんなの駄目、男の人のなんて…でも、あつ、またズボンの中でビクって、んっ、どうなっているんだろ、見てみたい…）

「チャックを降ろすんだよ、それくらいは出来るだろう？」

（こんなに窮屈そうだし、だ、大丈夫…見るだけ、みるだけだから…震える指先が男の股間を捉えそつとジッパーを摘み、ジジ、ジ…と音を立てながら降ろしていく。）

（あつ…）

やがて下着の前だし部分から覗いた想像以上に醜悪な見てくれに眉をしかめるが、むわっとした臭気が鈴仙の鼻腔をくすぐると先ほどまでと比較にならない程に下腹部の奥がジュンジュンと疼きだした。

（あうっ、なに、これ…強い匂い、あつ…クラクラしちゃう、でもいいにおい…）

男の巧みな技術と薬剤の効果により発情していると称しても差し支えの無い状態の鈴仙は「いいにおい」を求め、浅ましくも鼻をすんと鳴らしては、恍惚感に身をよじる。

（ここまでの痴態を晒して未だ処女と…私好みになんか仕上がってきたか）

平常時では到底考えられない事ではあるが、既に正気と正気の境が曖昧になってきた鈴仙にとっては特に疑問を浮かべる事でもなかった。

無意識の内に差し出された舌がふるふると震えながら、男の陰茎に伸びていく。

「遠慮はいらんよ、好きにしてみるといい」

「は、はいっ、失礼しますっ！」

軽く最後の一押しを行うと、鈴仙はおあずけを解かれた犬を彷彿とさせる勢いを見せ、はぼっ、と音を立てながら自身の幼い口唇に一物を飲み込んでいった。

（何これ、おいしいっ！あつたくて、トロトロしたのも流れてて、あつ…飲み込んだらおなかも熱くなって…ああ、おいしいっ、もつと、もつとほしいの…もつとっ）

控えめに舌で舐める程度の動きもすぐにエスカレートしていく。やがて、じゅびじゅびと音立てながらかぶりつき、頭を上下に振る様は誰がどう見てもフェラチオの動きそのものだった。

「くう、これはたまらんな…そろそろ出させてもらおう」

常に主導権を握りつつも我慢の限界が近づいていた男にとって喉を鳴らしながら積極的な口淫奉仕に励む幼子、と言ったシチュエーションが思いのほか堪え、溜め込まれた精液を盛大に噴出させる。

「んっ、んむっ、んっ…んぐっ…うぶうっ！んっ、んんっ…んっ」

口内で不意に爆発したそれは喉の奥に打ち付けられるが悪臭を放つ濁ったそれも鈴仙にとっては甘露の味わいに等しく、今も断続的に放出される精液を夢中で飲み干していく。

小さな口内に収まりきれない精液が唇の端から零れ、服の中にも染みこんでいった。



全身をふつふつと沸き立たせる熱い奔流に身を焦がす鈴仙は、信じられない程の量を射精しても尚、屹立を続ける陰茎に目が釘付けとなってしまう。

「次はこれをお突っ込んでほしいんだらう？そんな絶る様な目つきで見なくてもいいじゃないか」

（こんな大きいのが入ってきたら、私、どうなっちゃうんだらう？）
男女の営みについては全く知識が無かったが女として、生殖が旺盛な種としての本能が体の疼きを満たす方法についての問いを投げかけてくる。

もう自分でも分かりきっていた事だが、男に改めて指摘される事が引き金となり頭の中は完全にそれ一色へと染まる。

「は、はいっ、ほしいです、私、ここにを入れて欲しいです……」

正常な判断力を失って久しい鈴仙は内腿を擦り合わせながら、男へさらなる陵辱の手ほどきを請い、願う。

「別にかまわないが私は少々疲れていてな、こうして寝ているから後は勝手にやってもらえるか？」

仰向けに寝そべり、天を突く男のそれを見つめた鈴仙は例え様の無い高揚感と、更なる快楽への期待にゴクリと息を飲む。

寝そべっている男をまたぎ、狙いを定めた鈴仙はゆっくりと腰を落として行く。

やがて男の亀頭がふっくらとした陰唇を左右に割り、その奥に秘められた膣口に触れた。

腰が抜けてしまいそうな程の快感が広がるも、歯を食いしばり更に腰を落としていくとくちゅりと水音を鳴らして鈴仙の入り口が男をあっさりと迎え入れた。

「あっ、かっ……あっ……」

下腹部から脊髄を経由し、頭のとっぺんまで走った電流が鈴仙の更に細かな神経網すらも等しく、甘く、強烈に焼き焦がす。

鈴仙の身に降りかかった強すぎる性的快感は何処か死のイメージを想起させ、これを最後まで入れると気持ち良さのあまりに死んで

しまうのでは？といった益体も無い事が頭をよぎる。

無論、こうしている間にも膣口の入り口に収まった亀頭はドクンドクンとした脈動を続け、下腹部でとぐるを巻く性感の激流は鈴仙の心の全てを今にも飲み込んでしまおうだった。

「じれったい奴だな、こうして欲しかったんだらう？」

男が無造作に腰を持ち上げると、今までほんの先しか挿入されていなかった陰茎ががみちみちと音を立てて鈴仙の体内に侵入していく。

「あっ、かっ……ああ！まだっ、んんっ！だめ、うあっ……入っちゃだめえ！」

まだ心の準備が出来ていない鈴仙をよそに、ついに男のペニスが膣道へと入り込んでいく。

「ほらほら、結構すんなり入るじゃないか」

男の腰が進むに連れ、倍に、倍にと膨らんでいく快感に目を見開き、口をパクパクさせる鈴仙はついに処女膜までのペニスの到達を許した。

既に痛みを含めた全ての感覚が性感に置き換えられていた鈴仙の体は処女膜が割かれる強烈な痛みすらもそのまま強烈な快感へと転換させる。

「ひいっ！あっ！あああう、ひゃああっ、あーっ！ああーっ！」

その身に収めるにはあまりにも強い快感を前に、何もかもがオーバーフローした鈴仙は歯をガチガチ鳴らしながら処女喪失と今までに経験した事が無いクラスの絶頂を同時に体験する。

「あっ……ひっ、ああっ……んっ、ちゅばっ、んっ……ちゅむっ……」

意識が遠い空まで飛んでいたのも束の間、今も収まる事無く疼く体は更なる快楽を求め、あれほどに嫌悪していた男の唇に吸い付きながら男と繋がったままに卑猥なピストン運動を開始する。

単なる雌に成り下がった鈴仙にとっては結合から漏れるぐちゅ、ぐぼといった音が何より心地良かった。







今も、男達のをあんなに浴びせられて…
パチユリー様の綺麗な髪もお顔も
ドロドロになっちゃってる



うう、申し訳ありません。パチユリー様
私に不甲斐ないばかりに
こんな事になってしまっうなんて…



だな、お前もちょっと
こいや、主人と一緒に
可愛がってやるからよ



おいおい、向こうの
ガキも暇そうに
してるじゃねえか



やだ…意識したら頭ぼーってしちゃう
駄目！今はパチユリー様も居るんだから
私がしっかりしないと…でも



うぎ、こんなに大きかったなんて！
匂いもこんなにツンとして…
しばらく精なんて吸ってないから…

パチユリー様、おっぱいであんな事させられて
苦しやう…でも、乳首が凄いコリコリになっ
て…パチユリー様もエッチな気持ちにな
っちゃってるとるのかな

これが大人の男のなんだ…おっきくて、熱くて
ゴツゴツして…大きすぎて先っぽだけなのに
おおっ…やっぱ、美味しい…

だっ♡
だっ♡

ぶっ♡
くぽっ♡

くぽっ♡
くぽっ♡

ぐっ♡
ぐっ♡

ちゅぽっ♡

ほむ♡

この人も魚頭がパンパンに
膨らんでそろそろ出やう…

二人でペロペロ…
パチユリー様も一緒に…

ほい♡

おっ…

ちゅぽっ♡

くぽっ♡

おおっ…うき、こんなにいっぱい
やっぱりこれ美味しい、美味しいよお…
くっ、くっ…お腹の奥に
染みこんで胸がきゅんとしちゃうっ

こんなの、こんなの
逆らえない！もっと
もっと精液欲しいっ…！

びゅっ

あ…

びゅっ

あ…

くっ♡

くっ♡

くっ♡

くっ♡

こんなっ、道具みたいにされて…でもパチキュリー様とキスっ、キスっ！んおっ、おちんちんがおなかの奥をコソコソっ、んおっ、こんな近くでお顔を、真っ赤なお顔で…こうしてるおっ、私のキスで気持ちよくなってくれているみたい…

んっ！
ぽんぽんぽんぽんぽん

おおんっ、私のおまんこズボズボって使われちゃってるぅ

パチキュリー様と一緒に私達オナホにされちゃってるぅ

パチキュリー様っ、夢みたいですが、気持ちいい…気持ちいいよお！んっ、んちゅっ、もっとなんかキスしながら、二人でパチキュリー様っ、パチキュリー様！



お人形さんになっちゃうとな…
まあそれはそれで興奮するんだが

なんかこいつもうグッタリしててつまらん

あっ、私一人でおちんちん二つも貰えるなんて嬉しい！パチキュリー様の分まで沢山お相手しますね！私のお口も、おまんこも好きなので使ってくださいね！



まあ、こっちの奴がまだまだ元気そうだから相手して貰おうぜ

おうよ、こいつもぶっ壊しちまうか



N E X T

アリス・マーガトロイド



もうっ、またしたく
なっちゃったの？
せっかくの休日なのに
エッチな事しか
してないじゃない…

本当に変態なんだから、
もしかして、私の体が目的で
付き合ってるのか？

でもまあいいわ
射精する時の貴方の顔って
情けなくて面白いし…

ふふ、また固くなった
こうやって女の子に虐められるの
大好きなんだよね？変態さん

はい、あーんってしてあげるから
ちゃんと口の中に出してね？
始末するのも面倒なんだから。





ふふっ、相変わらず無様な格好晒してるじゃない

分かってるわよ、次はこうやって欲しいんだよねー、先っちょにこうやって被せてと…

あ、ごめんなさいね
少し強く踏みすぎちゃったかも…

でも貴方みたいな変態にはこれくらいで丁度いいとか？
きつとキウね、もうソックスの裏もヌルヌルし始めたし



ほら、こうすると私の下着が良く見えるでしょ？

いつもチラチラとスカートの下に目をやってみるもんね…気が付いてないけども思ったの？

えっ…！ウキ…！？

しかも両足よ、嬉しそうな顔してるじゃないこの変態、ほらこすこすっ…こすこすっ…

グワッ

ズキ
ズキ
ズキ

どひゅっ

ひゅるん

ひゅん♡

なごおの体勢で出しちゃうのまきうっ
服がドロドロになっちゃったじゃない

ちよっと、やだっ…バカッ！
やめなさいよ！今は出しちゃ
駄目なんだからっ！

ん

ハッ

ハッ

髪だって時間かけて
整えて来たのに…

え？さっきのプレゼント用の
包みって服だったの？

ま、まお…こんな格好だから
着替えてあげてほしいけど…



くううっ…アリスっ
僕だけのアリスっ！

今日も沢山種付け
してあげるからねっ！

嘘は駄目だよアリス？ほら
こうやって後ろから突き上げ
られるのが大好きなんだろう？

よしっ、出すぞアリスっ
一番奥だ！アリスの大好きな
生ハメ中出しだっ！

ズン
ズン
ズン

あっ
あっ

ひっ、あっ、あっ
気持ちひっ、ふっ
ふあうっ

はっ

あっ

こっち向いて！そうっ、うっ…
可愛いアリスの顔見ながら
おっ、おっ…

ドクン
ドクン
ドクン

どめめめ

きゅう

種付けって、あっんんっ…
乱暴なのは嫌！嫌なのにっ
あっ、ふあっ…あっ！

ははは、ぎゅうぎゅう
締め付けてきちちゃってまあ

相変わらずスケベな
マンコだな、声が
漏れちゃってるぞ？

あっ、あっ…
うっ、すすすっ…

あっ
あっ

な、なんでこんな昔の服まで引っ張り出してくるのよ小さくて着れてないってば...

駄目よっ、弄っちゃ、あっ
おあっ、イッたばかりで...
おううっ、おあっ!!

ほほ、ロリだった頃の
アリスってこんな感じ
だったんだあ...

何だかイケナイ気持ちに
なってきたな
これは責任を取ってもら
おうかね。



はい、お尻をあげまじようねー
アリスちゃんの大好きな
おちんちんの時間でちゅよー

この馬鹿っ...なんで
そんなしゃべり方に
なってるのよ

それにこんな格好恥ず
かしいってば、あっ

ちよっとまって
きこお尻! なっ
なんで!

おあっ、入って
入ってきちゃうっ!
やめっ...いやあっ!!



小さい子供を犯しちゃうと
犯罪になるけど、お尻の方
なら大丈夫なんだよ？

それに、こっちの
方も慣れたら結構
クセになるってば

ひっ、すすっ、すすっ…
苦しい、くるしいってば…

うあっ、かはっ…ふっ
お尻がゴリゴリされて
あっ、くいやっ、おあっ…

出さず、次はアリス
ちゃんのお尻シゴき
で出してやるっ！

おっ、あっ、くあ
おっ、あっ、くあ
おっ、あっ、くあ

おっ、おほっ…アリスちゃんの
お尻がエツチすぎるから
いっぱい精液出しちゃった

アリスちゃんも
気持ちよくなれたかい？

うっ、あっ…はあっ…

ぐったりしちゃって、ちょっと
小さい子には刺激が強かったかな？

まあ、このままドンドン
出させてもらうんだけど
ね…っと

なんでこんな奴好きになっちゃった
んだろ、私…でもまあいいか…
気持ちいいし…

博麗の巫女つつつても、こんなガキなら怖くも何ともねえよ

違いねえな、オラ……口開けろってんだよ！またぶっ叩かれてえのか？

おっ、おっ、おあつ……すげえ、こんな小さいくせになんつー胸してんだか

おおっ、たまんねえ……巫女服でバイズリいいわあ、出すの勿体無ねえくらいだ……

もっと手を動かさせようだ……いいぞよしよし……

この味をよーく覚えとくんぞおっ、おおっ！

そら、先汁でお前の胸がヌルヌルしてきたのが分かるか？

お前のスケベな胸が男に奉仕してるんだぞ……？

やだやだやだっ痛いっ、痛いからやめて！

そんなの入らない！いやああっ！やめてっ！

しかしこの変なカバン似合ってるなごんなんもんどうしたんだ？

まあ、その筋の奴からちよっとな……たまんねえ気分になつてくるだろ？

うっせーな、お前はもう家畜なんだから人間様に口答えするんじゃないよそら！開通だ！

いやああっ……おやおおっ……

た、確かに……なんかこう来るモノはある。

みるよこのツラをよ、イキまくって頭おかしくなつちまつてるぜ

くうっ、ガキマンコに中出しだ！そらっおっ、あああ……うっ、おおっ……おっはあ……

おほっ、痛そー

処女なんてめんどくせえだけだからな、さっさと使い込んで俺達好みの肉穴にしちまおうぜ。

はあっ、はあっ……そろそろ出るわあ……また一番奥に注いでやるぜ！

ドクッ

キザッ
グッ
グッ

じゅぽ
じゅぽ
じゅぽ

あれ、何で二人も居るんだ？

知るかよ2P
カラーって奴だろw

そらよ、次は後ろから
ガッツリとハメて
やるからな！

こっちは随分と強気
だなオイ、俺睨まれ
ちやつてるよ

んなの今だけだったの
チンポの事以外考えら
れなくしてやるぜ...

そらよっと...お待ち
かねのチンポが
へへへ、入っていくぞ...

ろれつ回ってねえじゃ
ねえか、どんだけエロいの？
声で鳴いてるか自覚あんの？

じゃあそろそろ
本番のケツ穴調
教と行きますか！

流石にこっちは
時間かかりそう
だな白目剥いて
るぜ、こいつ

あああ！かはっ
くっ、はあっ！
うああ！あっ
うああ！

直腸だ、流し込んで
やるぞ、おとおっ
出るぞ、このまま
くれてやるっ！

まあじっくり
行こうや、ケツ
でしかイケなく
なるくらいが
目標だな

ガッチガチに締め付けて
きやがる、ううっ
畜生、もう出るぞっ！

いいねえ、こいつも
しっぴかりイって
やがるし...

この青い方のガキ
はケツ穴専用
にでもすっか



あ



▲ 小嶋ではない

▼ 佐々木だと思って



と



お疲れ様で一しー、まだ終わってないけどね

紅楼夢スルー出来てこのザマかよ、クズ



イエス、アイアム

この1年振り返って、どうですか



安西先生の言う通りじゃね

まるで成長していない……と



すいません



イベント毎の新刊とか無理だったしね



イエス、アイアム



が

連絡先 : ghetto@e23.jp
発行日 : 2008/12/28
発行 : EARNESTLY JET CITY
印刷 : ねこのしっぽさま
URL : <http://remilireimu.seesaa.net/>

か

EARNESTLY JET CITY
2008